

# 大山信仰と日本人

新庄 靖弘

## (はじめに)

江戸時代に盛んになった大山詣でと日本人の信仰について考えてみたい。江戸時代大山は、江戸庶民の信仰を集め大山詣では、一大ブームを巻き起こし、宝暦年間(1751~1763)には、「盆山まいり(夏山)」に約10万人の参拝者があったと言われ、古典落語のひとつ「大山詣で」にもなって江戸庶民の旅文化として語られている。この落語からも分かるように江戸の庶民の旅というものは、なかなか自由に旅が出来ないものと一緒に思われがちだが、寺社仏閣の参詣目的で申請すれば、誰でも簡単に通行手形を貰えて旅をすることが出来た。江戸時代に盛んになったお伊勢参りも全国各地から伊勢神宮に最盛期は年間300万人もの旅人が向かっている。しかし本来宗教的な参詣旅というものは、日本人特有の建て前であって、弥次さん喜多さんの旅のごとく庶民の旅の実態は、世俗的な、あるいは観光的、娯楽的性格を帯びてゆく旅になっていった。

我々世田谷区誌研究会学習会のメンバーは、平成28年11月16日に大山街道歩きを活動テーマにして、東京の赤坂御門から大山阿夫利神社下社まで歩き終え、江戸庶民の大山詣での時空を越えた旅を体験している。



※大山道の道標の上には、お不動様が上にある(三茶交差点)

この大山詣での現在の大山阿夫利神社の祭神は、天照大神の兄神にあたる、大山祇大神で第一代神武天皇の外曾祖父とされる尊い神である。しかし世田谷区内の旧大山街道沿い、例えば三軒茶屋交差点の大山道の道標の上などには、お不動様の石像が上にあったりして、お不動様と、阿夫利神社との関わりに前々から不思議に思っていたのだが。特に調べもしないまま、日本伝統の宗教感の神仏習合の一形態のことかと思っていた。



大山は、神奈川県丹沢大山国定公園内にある、標高1,252mの三角形の山容の古くから庶民

の山岳信仰の対象とされていた。 大山の山頂にある 巨大な岩石のご神体（磐座）があり、かつては「石尊大権現」と呼ばれていた所に現在、阿夫利神社の本社（上社）がある。中腹に立派な社殿の阿夫利神社の下社が建っている。

大山信仰の歴史を遡ってみると、山頂の発掘から縄文時代後期中葉の土器片や古墳時代の土師器片・須恵器片などが発掘されており、信仰開始の時期はかなり古いと推定されている。「石尊大権現」の磐座から考えると、日本古来土着信仰のミシャクジ神に繋がる古いものかもしれない。伊勢原市内の大山街道の最終区間の山麓にいわゆるミシャクジ神系の子安神社、諏訪神社もあり、古代の東日本に広がっていた古代縄文時代の土着信仰、古代ミシャクジ※1 信仰地域であったことがうかがえる。

## （大山寺の歴史）

大山寺の歴史を簡単に遡ってみると、755年（天平勝宝7）に東大寺初代別当の良弁僧正が大山寺を開創したとの記載が、『続群書類従』第27 揖下釋家部の『大山寺縁起』（真名本）にある。大山寺は、聖武天皇による国家安穩を祈願する勅願寺として、行基の命により762年（天平宝字5）に光増が不動明王を制作して本堂に奉納している。878年（元慶2）の大地震と大火により大山寺は焼失しているが、884年（元慶8）安然が再興して、天台宗系の修験道の場として発展してゆく。という訳で、歴史的に見れば奈良の東大寺と同時代に遡る大山寺の歴史があったのだ。

平安時代の末には大山は、地元の糟屋氏が支配する糟屋庄に編入され京都の安楽寿院に寄進され、その後藤原氏等の領地になっていた。鎌倉時代には、糟谷氏が源頼朝の御家人となった為、大山寺は、鎌倉幕府の庇護を受けることになり、源頼朝や源実朝から寄進を受けた事が、『吾妻鑑』に記載されている。その後、一時荒廃していたが、真言宗の願行房憲静の手で復興されている。この時、願行は、蒙古襲来撃破の為の秘法を習得するために大山に登り、百日間の苦行を行い祈り続けると、怒り狂った不動明王の姿が見えたという。願行は、この時の不動明王の姿をもとに鉄造の不動明王像（国重要文化財）を制作している。



室町時代になって当初、室町幕府の庇護を受けていたが、幕府の衰退に伴い、外部からの侵入や管内の修験道の勢力に悩まされるようになっていた。この室町時代の後期に『大山寺縁起絵巻』が出来ている。

戦国時代には、大山は小田原北条の支配下に入り、修験道勢力も北条氏の傘下になっている。1590年（天正18）豊臣秀吉の小田原征伐時には、大山の修験道勢力は、北条氏側について激しい戦いを繰り広げて活躍していた。この頃の大山の修験道は、天台宗・本山派玉瀧坊の傘下にあった。

## (大山詣での始まり)

小田原北条氏陥落後、江戸時代に入ると、徳川家康は敵対していた大山の修験道勢力に対して厳しい姿勢で臨み、大山修験道勢力を全て下山させ、山内の居住は清僧（学僧）のみで25口に限定して許可することとし、さらに大山寺を天台宗から古儀真言宗へと改宗させ、初代学頭に実雄法師（古義真言宗）を任命し定住させている。家康にとっても北条方についていた、修験道勢力は恐れる勢力として捉えられていたのだ。そのうえで1608年（慶長13）に御朱印地等を寄進するなど経済的な援助を強めている。徳川家光は、大山寺の「寛永の大修理」に際し、工事費に1万両を寄進して、落成祝賀等に春日局を二度代参させたりしている。

そして下山させられた修験道達は、大山の麓に居住して、御師として大山信仰の布教活動を行うとともに、宿坊や土産物屋の経営などが始め、その結果、門前町が出来上がってゆき、大山詣での人々が徐々にやって来るようになっていく。

更に御師達は、関東一円の精力的な布教活動の展開を大がかりに進めてゆき、江戸市中をはじめ関東一円から大山詣での旅が盛んに行われるようになってゆく。これらの大山信仰の旅は、大山講と呼ばれ各地から大山へ通じる道は、「大山道」と呼ばれるようになる。元修験者達は「御師」として各地にセールス活動を展開し、計画的に講を組み参詣者の先導役を務め、各地から講ツアー御一行様を引き連れて来る。こうして山麓の宿坊はや門前町は、繁栄してゆくことになる。江戸市中からの講ツアーの一行の往路は、赤坂御門から世田谷・二子・厚木経由の大山街道で大山に向かい、参詣後の帰路は、江の島・鎌倉・金沢八景等観光旅行を楽しみ、江戸の手前の品川宿等で盛大にお楽しみ打ち上げをするのが一般的なコースであった。江戸庶民にとって大山詣で旅は、平和の続く江戸時代にあり、手軽に、非日常体験できる、信仰と遊興の人気の旅であった訳だ。

江戸時代の各地への参詣は、大山詣でに限らず、伊勢参り、金毘羅参りなどの参詣の旅は、建て前は、神仏信仰、本音は、物見遊さん観光の旅であった。江戸時代末には、大山講の総数は、15,700、総檀家数は、70万軒あったと言われている。このように大山詣でが流行するようになったのは、前述のごとく大山から下山した元修験道達が御師となつての積極的な布教活動、すなわち講ツアーのセールス活動の成果が大きく貢献しており、加えて『大山寺縁起絵巻』の内容が民間に広く伝わったことも大きく影響している。御師の布教活動・セールス活動は今様、トラピクスやキンツリ等の旅行社の営業活動そのものであった。これらの神社仏閣信仰・本音は物見遊さん旅好き日本人の特質ともいえよう。

## (廃仏毀釈と神仏分離令のこと)

江戸時代の大山詣での大山寺は、修験道の山で、いわゆる神仏習合の寺であった。明治維新になって、突如として廃仏毀釈・神仏分離の嵐が全国的規模で吹荒れて、明治初年（1868）ここ大山寺も一挙に廃仏・神社化が図られてしまった。それは、国学者・神道家の権田直助に率いられ、大山におしかけた数百人の暴徒達によって、大山中腹にあった大山寺不動堂は、瞬く間に破却されてしまい、かつての大山寺の場所には、現在の大山阿夫利神社下社に変わってしまった。幸いにも御本尊をはじめ数々の寺宝は、地元の人達のお陰で破壊を免れていた。その後20年近く経って不動堂の再建が着手され1885年（明治18）明王院という寺名で、ケーブルカー途中駅近

くの現大山寺の場所に再興されている。1915年（大正4）になって、明王院は、観音寺と合併してようやく大山寺の旧寺号が復活している。

我々世田谷区誌研究会の大山街道学習会の実踏で大山ケーブルで阿夫利神社に上がる途中、大山寺駅で途中下車して**阿夫利山大山寺**と界限にある龍神堂、来迎院客殿を探訪している。江戸時代は、大山寺自体、現阿夫利神社の場所にあった訳で、明治に中期に現在地に再興されていたのである。

全国的に吹き荒れた廃仏毀釈・神仏分離で日本の文化財も大きな影響があった。ここ大山もすっかり江戸時代から歴史文化が変わってしまっている。すなわち明治になって政府の国家神道の施策でもあった。穏やかと思える日本人も歴史的にみると、バーミヤンのタリバンの行った如く、文化財を叩き壊してしまう暴挙に走ってしまうこともあったのだ。このような廃仏・毀釈の歴史的事実が明治の初めにここ大山にもあった事を我々、特に区誌研究会のメンバーは、心に留めておかなければならない。

という訳で三軒茶屋の追分道標の上に不動様があることが理解できるのであった。

— 完 —

※1. ミシャクジ信仰 古代先住民に崇められていた古代土着信仰。特に諏訪地方の諏訪大社が知られているが、東日本の広域に分布している。当初は、山、石、樹木を依代とする神であったとされるが、地域によって時代を経るにつれて変容して普通の神社になっている場合が多い。学習会の座学に、大山街道沿いの高津区役所の観光担当者のお話しを受講しているが、学習会の参加メンバーから溝ノ口神社にあったオシャモジは何の意味なのかとの質問があったのだが、当の担当者は答えられなかった。これは正しくミシャクジ信仰の名残そのものなのだ。世田谷にも世田谷城の北に杓子稻荷神社がある。三宿神社の由緒も定かに解っていないが、これは多門山にあった古代土着信仰の名残と考えている。三宿の地名は、水の豊富な場所という説がまかり通っているが、実はミシャクジ地名そのものだ。

明治になって、廃仏毀釈によって寺も大きな変容を遂げているが、神社についても国家神道にそぐわない神々は、整理されたり合祀されたり、祭神が本来の神ではなく、神話系の神に入れ替わっていることが多い。